

◆連載-Vol.12

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人(建築ジャーナリスト)



**執筆者プロフィール**  
中谷 正人(なかたに・まさと)  
1948 神奈川生まれ。1971年  
千葉大学建築学科卒業。『住宅  
特集』『新建築』編集長を経て  
1994年からフリー編集者。  
1999年~2014年千葉大学客  
員教授。木の建築フォラム理事、  
日本建築学会建築文化事業委員  
会幹事

## モダニズム建築の揺籃期 その4

### アメリカン・アール・デコ

ヨーロッパでは建築や装飾、デザインがアール・ヌーボーからアール・デコへと変化し、北欧などではナショナルロマンティシズム華やかなりしころ、新大陸、アメリカはどうだったのだろうか。本来は「アメリカ合衆国」と呼ぶべきだろうが、ここでは煩雑になるので単に「アメリカ」と記すことにする。

アメリカ建築の歴史はヨーロッパと比較すれば浅く、1620年、イングランド国教会から分離した清教徒の一団がボートピープルよろしくメイフラー号に乗ってアメリカ大陸に渡つてから始まる。

時代的に言えばヨーロッパの宗教改革以降がアメリカ合衆国の始まりであって、建築はヨーロッパの古典様式をベースにしていたのだろう。ヨーロッパに、おそらくイギリスに範をとりながらも、やがてアメリカン・ボザールからアール・ヌーボーを飛び越して一気にアール・デコに突入したのは熟練した職人がいなかったことにもよるのだろう。アメリカン・ボザールは、パリのエコール・デ・ボザールを卒業したアメリカ人が本国に戻り、自分たちの設計の出自を誇るために名乗った呼称だ。

すでにレイモンド・フッドにまつわるアメリカの状況は記したが、「オーディトリアムビル」(1889)や「カーソン・ピリー・スコット」(1904)を代表作とし、フランク・ロイド・ライトの師匠でもあったルイス・サリバンもこのひとり。サリバンたちはシカゴ派ともよばれ、鉄骨構造の高層建築を手がけたことでも知られるが、デザイン的にはボザール様式を守り続けたと言えよう。

しかし、サリバンが開発した鉄骨造から衣裳を剥ぎ取り、構造システムそれ自体を建築のデザインとしたのはミースで、これが今やアメリカを代表する建築様式、モダニズム建築となったのだ。

「形態は機能に従う」とはルイス・サリバンの有名な言葉だが、建築は機能や構造がそのまま外観の形態として表れてくるはずで、それとは無関係に装飾することを戒めている。しかしサリバンの作品を見ると、たしかに装飾は少な目かもしれないが、現代建築を見慣れたわれわれには…。

アール・ヌーボーがアメリカに見られないのは、伝統的な職人がいなかっただけではなく、抛るべき規範や具体的な歴史デ

ザインが目の前になかったことにも起因するのだと考えたい。

だからこそ、工業技術の象徴ともいえるアール・デコはヨーロッパよりアメリカで花開いたといえよう。もともとヨーロッパの宗教的な圧迫から逃れた清教徒が切り拓いたアメリカだからこそ、歴史や伝統にとらわれず、新しい形式を受け入れやすかったのではないか。まして機械生産が主流となった当時の社会状況では当然の流れだったのだろう。

AIA(アメリカ建築家協会)が発行するアメリカ建築のガイドブックでは、アール・デコをストリームライン・モダンとジグザグ・モダンのふたつに分類している。

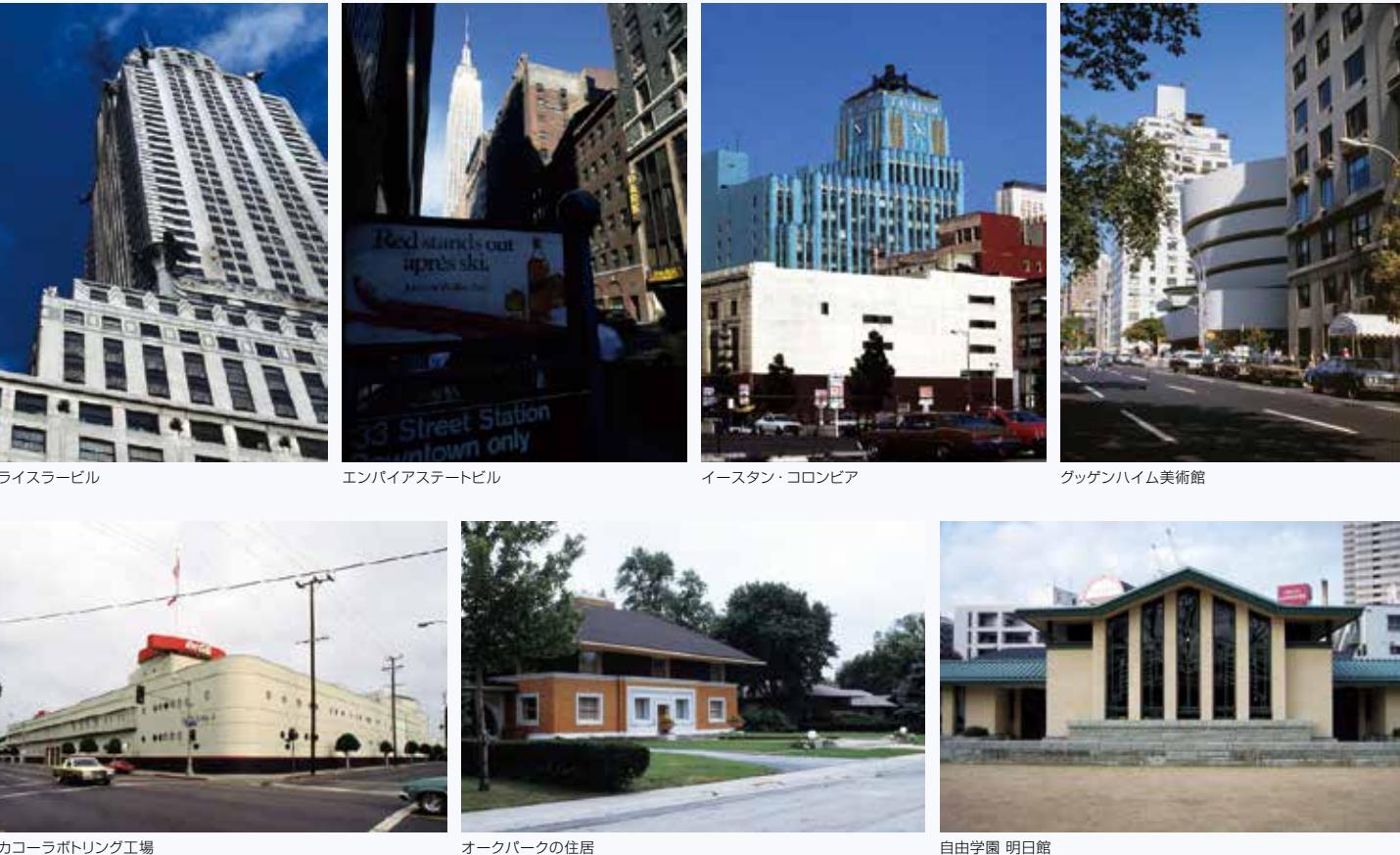
アール・ヌーボーは植物などを思わせる自由曲線を多用した有機的なデザインであり、アール・デコは自動車や飛行機などの工業製品をモチーフとしているとの指摘もある。

まさにその通りで、アメリカン・アール・デコの代表作は何と言っても1930年代のニューヨークに林立した摩天楼群であろう。1929年の竣工当時は世界一の高さを誇ったウィリアム・ヴァン・アレンの「クライスラービル」、翌1930年には世界一の高さを奪い取った「エンパイアステートビル」、そしてフッドの「ロックフェラーセンター」(1939)など、いずれもアール・デコに分類されている。

蛇足ながら、この頃のニューヨークの世界一獲り物語はなかなか面白い。世界一高いビルがステータスだったのだ。この狂騒、いや競争は現在でも続いている、2010年に竣工したブルジュ・ハリファはそれまでの世界一だった上海中心ビルを一気に196mも抜いて世界的な話題となった。一方、日本では一昨年竣工した大阪の「あべのハルカス」が日本一の座を「横浜ランドマークタワー」から奪い取った。「横浜ランドマークタワー」の高さは296.33m、あべのハルカスは300m。その差は実に3.67mもあるのだ!

「クライスラービル」は名門の自動車メーカー、クライスラー社の本社ビルであり、外観にはメタリックな装飾が施されている。内部もクラフト的な要素が多いが、アール・ヌーボーのような手仕事の滑らかな曲線は残念ながら持ち合わせてはいない。しかし、世界一の自動車メーカーという権威性は、メタルによる装飾に表現されている。

キング・コングによって何度も壊された「エンパイアステートビル」の屋上に設けられた塔の用途は、この時代の最先端の技術を実によく表わしている。スケッチにも描かれているのだが、飛行船を係留するためのものであった。



ロバート・ディラーの設計で1929年に竣工したロサンゼルスの「イースタン・コロンビア」は、目にも鮮やかなコバルトブルーや金色のタイルで外観を覆い尽くしたジグザグ・モダンである。ここにも古典的な三層構造を見ることもできるが、東海岸のアール・デコが持っている重厚さよりも、底抜けの明るさが強く印象に残るのは、ハリウッドがある西海岸特有の気質のせいだろうか。

ディラーはさらに1936年、ロサンゼルス郊外に「コカコーラボトリング工場」を設計。これはストリームライン・モダンとされており、白い躯体、地面に接するあたりは黒く塗られ、水切り線のように赤いラインが入り、赤い搭屋とも相まって、海に浮かぶ客船を思わせるようなデザインである。

フランク・ロイド・ライトの作品をアール・デコに含める説もある。1906年に竣工したシカゴのロビー邸をジグザグ・モダンというのだが、これにはちょっと首を傾げてしまう。ライト自信はインカ族などのアメリカ先住民が好んで使ったパターンをモチーフとしたと述べていたのだから。

アメリカの大草原を思わせるブレーリースタイルの住宅を数多く生み出したライトだからこそ、様式や主義ではなく、身边にある自然をモチーフとしたデザインとして理解したい。

ついでながら、私が学生の頃に読んだ、ペーター・ブレイクは著書『現代建築の巨匠』ではコル、ミース、そしてライトの3人を挙げていた。ところがいつの間にかライトが姿を消してしまった。いまではグロピウスがライトの代わりだったり、あるいはルイス・カーンを加えたりしているようだ。

たしかに、ライトは毛色が変わっていた。ミースやコルが論理的であるとすればライトの造形は情緒的とも言える。ライトの作品を有機的だと表現する研究者もいる。またライトをモデルとして、グーリー・クーパー主演の映画「摩天楼」が制作された。主人公は施主の希望が気に食わないといって工事中の現場に火をつけてしまうという、かなり過激な建築家であった。そんな主役をライトとダブルでイメージしているかは疑問だが、あるスキャンダルが元でアメリカを出てヨーロッパを放浪し、日本にたどり着いて「帝国ホテル」(犬山の明治村に玄関回りのみ移築保存)や池袋の「自由学園」、芦屋の「山邑邸」(現淀川製鋼迎賓館)などを設計した。そんなライトを生んだのがアメリカだったのに、アメリカの建築界は、ドイツから亡命してきたミースを受け入れた。その後のアメリカ、いや世界中の主流となるデザインが、ミースの主導によって展開されたのだが、これこそがアメリカ的なのかもしれない。

いずれにしても、経済的なニーズの肥大化、それに寄り添う技術の急速な発達などに従って、巨大化と機能や構法の先鋭化を余儀なくする現代建築では、情緒や美しさなどはあまりにも恣意的で扱いにくい分野なのだ。おそらく20世紀以降、共通の美意識すら曖昧になってきた。それはRationalismという言葉の翻訳に、審美的な要素を含む「比率」という言葉を当てなかつたことからも推測できる。

建築から徐々に「美」が排除され、機能性や合理性が偏重されるようになった。(続く)